

# カンボジア・コンポントム州の人たちのすぐそばでの暮らし ～根を生やし、共に学び合い生きていくということ



かとう けいこ

(株)まちづくり観光デザインセンター代表取締役  
(一社)北海道開発技術センター参事  
北海道大学大学院農学院共生基盤学専攻博士課程(D3)在籍。

主な公職は、JAF社員、アイヌ文化ツーリズム検討委員会座長、北海道競馬運営委員など。

カンボジアという国に対して、過去の長きにわたる内戦の記憶から、紛争や地雷など負のイメージを持つ人も多いかもしれません。カンボジアはインドシナ半島の中心に位置し、タイ、ベトナム、ラオスと国境を接し、平均年齢が若く労働力が豊富で政治が安定しています。外国からの投資の受け入れ体制が良いです。国際協力機構(JICA)をはじめとする日本の関係機関も深く関与しており、親日的な感情を持つカンボジア人も多いことから、今後は人的な交流の充実にも期待できます。

日本に渡航するカンボジア人は2008年が2,701人、18年は21,696人。同年のカンボジアから日本への渡航者は、10年前の約8倍で、ASEAN諸国の中でも突出した伸び率となっています。しかし、北海道との接点及び交流の実感にはベトナムやタイに比べると薄いという実情もあります。

2020年2月に岡山、鹿児島、千葉、東京の仲間と共にカンボジアとベトナム(ホーチミン)に、「教育と観光で日本とのビジネスでの協働の可能性」をテーマに調査しました。本稿は前回(当誌2020年8月号)に続く報告です。

学生時代に「カンボジアの文化遺産の保全とまちづくり」という講座を受講したことをきっかけにカンボジアと出合った日本人が、12年間カンボジアに暮らし続けています。地元へ溶け込み、自らを「勝手にこの地域の私設応援団長的なポジションで楽しんでいる」と評すその人は、札幌出身の吉川舞さんです。

カンボジア3番目の世界遺産、「サンボー・プレイ・クック遺跡群」と、隣接する農村に綿々と続く人たちの暮らしの中で、古くて新しい旅の形を提案しています。世界遺産と地域との関係を含め、北海道の私たちが学びたいことが、そこにはあります。

## ◆ カンボジアの印象

吉川さんが最初にカンボジアを訪れたのは、2004年9月大学2年生の頃。サンボー・プレイ・クックを舞台に「遺跡の保全と村づくりを学ぶ」がテーマのスタディツアーに参加しました。

街のあちこちに壊れかけたビルが立ち、荷台に何十人も人を乗せて走るトラックはオンボロ。でもそれとは裏腹にそこにいる人たちは立ち上るような勢いがある。

りました。赤茶けた土地と内戦後の人々の写真しか知らなかった吉川さんにとって、想像をはるかに超えた生きるエネルギーがそこにはありました。さらに、サンボー・プレイ・クック遺跡周辺の農村で、吉川さんは完全にカンボジアの魅力にとりつかれました。大学の先生たちが実施していた地域の家計調査について行って見た村の人の生活が、大地に根を張った、非常に安定感のある暮らしであることに驚きました。在学中、村に通い村の人たちとの出会いを重ねる中で「遺跡は、そこに住む人々とともに地域社会で育まれてきたもの」と、考えるようになりました。村での暮らしのなかで、この遺跡が持つ古代の世界観と地域が持つ「暮らしを創る力」は、これから先の未来にとって大事な力になると思うようになりました。

#### ◆ カンボジア移住当初

08年3月に大学を卒業後、アンコール遺跡群のあるシェムリアップに移住しました。日本で就職が決まっていた企業もありましたが、両親を説き伏せカンボジアに向かいました。日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA/JASA）の現地広報を5年間務め、地域の人々や観光客に遺跡にまつわる様々な情報を、より広く伝える事業として、スタディツアーなどを企画・運営していました。「遺跡」と「観光」の距離をもっと縮め、持続可能な形で新しい遺跡保存のあり方を生み出そうと試行錯誤をしながら未踏の分野を切り開いていこうとしていたのです。

#### ◆ 会社設立

14年に拠点をサンボー・プレイ・クックに移しました。仕事を辞めて遺跡だけではなく村に入りだし、翌年「Napura-works（ナプラ・ワークス）」をご主人の八木祐樹さんとともに立ち上げました。コンポントム州で最初の同州を専門とする旅行会社です。でも、旅行会社と名乗らず、旅を作る会社と自分たちを紹介しています。社名の「ナプラ」は、7世紀にこの土地にあった都市「イシャナプラ（北の都）」から取りました。



サンボー・プレイ・クック遺跡にて。吉川さんとビジネスパートナーでもある、ご主人の八木祐樹さん

遺跡だけではなく、自然や地元の人々の暮らしにも出会いたいというお客さまを、地域の人たちとつなぐのが仕事です。地元のコミュニティガイドやホームステイと協働しながら、地域の人々が自分たちの暮らす土俵で収入を得られるような橋渡しをしています。

#### ◆ サンボー・プレイ・クックの魅力

サンボー・プレイ・クックは6世紀末から9世紀頃を中心に建立された王のための寺院です。有名なアンコールワットよりもさらに500年以上前の時代に建立されたレンガ造りの寺院が木立の中に点々と並びます。カンボジア国内では、遺跡を取り巻く森とともに避暑地としても人気を集めています。7世紀の遺跡と現代に生きる自分がそこに暮らす人々を介してつながる、遺跡生態系に組み込まれていくことを感じられる場所です。サンボー・プレイ・クック遺跡群の魅力は、遺跡を取り巻く森と、その周囲に広がる農村地帯と共に存在してきたことだと考えています。観光客もまだ少なく、ゆったりとして快適である反面、都市から遠く、その魅力が伝わりにくいという悩みもあります。

サンボー・プレイ・クック遺跡は、カンボジアのへそと言われる中部コンポントム州にあります。首都プノンペンから車で約4時間、シェムリアップからでも約2時間の場所にあります。

### ◆ 村に伝わる精霊を祀る儀式

もっともサンボー・プレイ・クックに近い地域の人々は遺跡の祠堂しどうの中に、地域を守る精霊が住まっていると考えています。遺跡の一番近くにある村の人々は、年に2回、中心的な祠堂の中にいる精霊に祈りを捧げ、遺跡の前で儀式を行って暮らしの安泰を祈ります。

また、家族や自分の周囲に良くないことが起こった時にお供えを持ってお祈りに行きます。何もないけれど休日や家族の大事な日に精霊に祈りを捧げる風景があります。カンボジアでは今でもピクニックなどに出かけたとき、木の下にお皿や葉っぱを広げて、持ってきたお弁当から一品ずつを捧げて土地の神様に「何事も起きませんように」と祈る姿を見ることがあります。DNAの中に残る遠い記憶が現れているのでしょうか。「カンボジアの森には精霊が住んでいるから、彼らと分かち合うんだよ」と言いながら小さく祈りを捧げます。ああ、美しい文化だなあと思います。自然の中で暮らしている人はそういう記憶があるのかもしれない。

### ◆ 世界遺産登録による変化

サンボー・プレイ・クックが17年に世界遺産登録されたことを地元の人たちがどのように捉えているかは、立場によってまちまちです。もちろん、カンボジアという国やコンポントム州の遺跡保存に携わる行政官、そして研究者たちにとっては、時間とともに少しずつ劣化してその姿とそこに込められた情報が失われていく状況の中で、遺跡を未来につなぐという観点からも世界遺産登録は悲願だったと思います。一方、周辺地域の住民の中には「世界遺産」という言葉に慣れ親しんでいないため、イメージがわからない方も多いようです。とは言え、周辺では、地域住民の方々が積極的に遺跡の保全や修復に携わっています。

### ◆ 地方創生の一つの形としての世界遺産登録

地方創生の基本は「地方への人の流れを作り、経済を活性化させる」ことにあります。世界遺産登録によって「人の流れ」ができます。来訪した人たちを満足させるサービスが生まれ、新たな雇用の創出につなげる

#### 世界遺産とは

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から現在へと引き継がれてきたかけがえのない宝物です。現在を生きる世界中の人びとが過去から引継ぎ、未来へと伝えていかなければならない人類共通の遺産です。世界遺産は、1972年の第17回UNESCO総会で採択された世界遺産条約（正式には『世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約』）の中で定義されています。18年12月現在、世界遺産は1,092件（文化遺産845件、自然遺産209件、複合遺産38件）、条約締約国は193カ国です（日本ユネスコ協会連盟HPから引用）。

#### 日本における世界遺産登録

日本の自然や歴史的な遺産などが、相次いで世界遺産に登録されています。私たちが暮らす北海道、お隣の東北地区で力を合わせて運動してきた「北海道・北東北の縄文遺跡群」も2019年12月に、21年の世界遺産登録をめざし、ユネスコへの推薦が正式に決まりました。現時点で日本の世界遺産登録数は23（文化遺産19、自然遺産4）です。

注：中央アメリカは北アメリカに含まれている。エリアが重複する国をカウントしているため、世界遺産総数が1,199になっている。出展：国連データを基に筆者が集計。

#### 世界遺産の数

世界遺産条約締約国	193カ国
世界遺産総数	1,121件
文化遺産	869件
自然遺産	213件
複合遺産	39件
危機遺産	53件
登録抹消された元世界遺産	2件

#### 地域別世界遺産数

エリア	比率	件数、国数
ヨーロッパ	43.62%	523件、45カ国
アジア	25.52%	306件、46カ国
オセアニア	2.59%	31件、14カ国
北アメリカ	9.51%	114件、23カ国
南アメリカ	6.67%	80件、12カ国
アフリカ	12.09%	145件、53カ国



ことができれば、「世界遺産登録」によって地方創生の一歩を踏み出すこととなります。提案資産の世界遺産登録の成否や実現性の問題は別にして、登録運動を契機に地域固有の文化遺産の価値を再考し、住民の主体的な参加があり、環境や景観の保全や質の向上など、地道なまちづくりと結び付けた活動を継続していくことが重要です。それらの地道な活動の積み上げが、結果として一過性でない、中長期的な地域の観光振興等の波及効果を生み出し、持続可能な観光地を形成していくことにつながっていくものと思われます。

一方で、わが国の世界遺産登録地の中には、登録後の観光客の急激な増加によって環境や景観が悪化する事例も目立ち、世界遺産登録と持続可能な観光地づくりのあり方が課題となっています。中長期的に環境や景観の保全と地域資源の活用を両立させた計画を策定した上で、持続可能な観光地づくりに住民主体で取り組むことが求められています。

繰り返しになりますが、世界遺産登録は、遺産を人類共通の財産として恒久的に保護することが最大の目的です。本来の趣旨からすれば観光振興は副次的なものと言うべきでしょう。地域の観光振興という副次的な経済効果を求める地方自治体や地域の関係者には、世界遺産の趣旨や概念を十分理解、認識した上で、地域資源の保護と活用を両立させた持続可能な観光地づくりに取り組むことが求められています。

また、UNESCOでは世界遺産登録物件の不均衡や物件数の増加に伴って適切な保護ができなくなるとい



吉川 舞さん (よしかわ まい)

札幌市生まれ、札幌南高校、早稲田大学人間科学部卒。19歳の夏にカンボジアの遺跡と人々に魅せられ、学生時代のほとんどをカンボジアに捧げ卒業と同時に移住。2008～13年まで遺跡修復チームの広報を担当。14年よりコンポントム州のサンボー・プレイ・クック遺跡群を拠点に旅行社「Napura-works」を起業。

う危惧から、登録審査を厳格化するなど新規登録のハードルは高くなっています。

#### ◆ トヨタ財団の支援を受ける

吉川さんは2016年に国際プログラム「新しい文化の創造：これからのアジアの共通基盤の構築」で1年に300万円の助成を受け、地域で観光を担うプレイヤー同士が国を超えて学び合うための事業を実施しました。

- 1) 世界遺産という大きな観光資源を擁する地域が、それに依存することなくその土地の文化や暮らしに根差した価値あるコンテンツを地域の規模に合わせて提供していく。
- 2) 訪問者との密な関係性の中でより大きな社会的・経済的利益を生むようなコミュニティ・ベースド・ツーリズムの確立を目指していく。
- 3) 地域の中で多様な主体が意見を交わし合い、自らの地域の価値を再認識し、課題を解決できるプラットフォームを形成する。

こうした共通の願いを実現するために、小規模ながらも深い地域文化体験に立脚した観光を実践しているイタリアのシチリア島と沖縄県南城市、奈良県十津川村とカンボジアが互いに学び合い、自らのフィールドで継続性のある企画・実践へとつなげることを目指すものでした。

#### ◆ その土地に身を置いて感じる

トヨタ財団から助成を受け、吉川さんはサンボーの仲間たちと一緒に、沖縄県南城市の世界遺産・斎場御嶽と世界遺産・熊野古道が通る、奈良県十津川村の2カ所を視察しました。琉球王朝で最も重要な祈りの場である斎場御嶽も巡礼の道である熊野古道も、その場所を理解するために、その場に身を置いて感じる時間が必要な点や地域の中に世界遺産だけでなく豊かな地域文化を伝えたいと思い活動する人たちがいること、そして都市への人口流出など地方が抱える普遍的な課題を抱えていることなど、地域や国を超えて共通点がありました。だからこそ、その場所に滞在して学び合うことで未来につながるヒントが、地域の担い手

の中に生まれることを期待していました。

世界遺産近隣の集落の方の"普通の晩ご飯"にお招きいただき、農家民宿に通訳なしで泊まるなど「お客さんになってみる」という人生で初めての経験をしました。それぞれの場所での濃密な出会いを通じて「魅力的な地域の人を訪れる目的になり得る」ということを実感し、地域の暮らしを持続可能にするための手段としての観光の可能性を共有する機会になりました。

#### ◆ 未来に向けて

一生遺跡と暮らしていきたい、現場にいたい、と吉川さんは話します。ライフスタイルの変化によって自分の在り方の変化もあるかもしれませんが、折り合いをつけていきたい。観光によって地域に不利益をもたらすことは避けなくてはならない。地元の人たちの一番近くにいたる気軽な事業者で、彼らが新たにやりたいことがあるときに「外国人的にどうかな」と聞いてもらえる関係でいたい。外国人が村の人の暮らしに疑問を感じたり誤解をしたときに、すっと説明できるような伴走者の立場にありたい。そして、遺跡修復、遺跡研究、観光の3つを結びつけ、地域とこの場所を訪れた人たちの利益を相乗的に生み出し、地域や遺跡の魅力を深めることに貢献したいと考えています。トヨタ財団での研修を通して、吉川さんはガイドというより、DMO\*的なポジションで活動していくべきなのかと考えるようになりました。

カンボジアは、"子どもが社会の宝"という意識が強いので、居心地がよいと感じています。仕事する自分、子育てする自分、料理や手仕事を習う自分というポジションが多面体である方が親しくなれて楽です。子どもが生まれたことによって新しいご縁が生まれ、途切れていたご縁が復活しました。サンボーのような小さな村には赤ちゃんから80歳までのあらゆる年齢層がそれぞれ元気に生きています。道行く人たちと言葉を交わして、相手の変化を見ながら生きていきたい、5年後どうするかを今、考えていると言います。村や遺跡、その先の村をゆっくり歩きながら、気が付かなかった課題を見つけているところのようです。

#### \*DMO

地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光経営学」の視点に立った観光地づくりの舵取り役。多様な関係者と共同しながら、観光地域づくりのための戦略をつくり、実施する調整機能を備えた法人。



エネルギー溢るサンボー・プレイ・クックの村人

#### 取材後記 ◆ ◆ ◆

吉川舞さんが北海道で生まれ育ったことは、その後の吉川さんに少なからず影響がありそうです。20代の自分を生き急ぐサラブレッド、今の自分をばんえい競馬のばんばに例えてくれました。頭でっかちで筋力も経験も不足しているのに、うっかりレースに出ていました、足を取られて転んだり、怪我したり…と笑って話す姿には逞しさを感しました。

ザ・世界遺産の代表のようなアンコールワットは、説明を受けずにその場所に行っただけで、その世界観に圧倒される場所です。それに比べ、サンボーは目に見えるものが少なく、短時間の滞在ではわかりづらいかもかもしれない文化遺産です。沖縄の御嶽は折り、そして熊野古道も歩いて感じる、「主体性や少しの予習、伴走するガイドが必要」な遺産です。これは北海道・北東北の縄文遺跡群にも共通している気がします。

吉川さんは、コロナでリアルな旅ができない4月から「旅するZoom」を実施しています。「決まった行程を持たず、目の前に起こることと一緒に旅する仲間との対話の中で旅を作っていきます。10月、11月には、サンボーを地元の私たちが実際に歩きながら旅をします。朝の爽やかな空気を届け、家族の台所におじゃまし、ハンモックでゆっくりお昼寝する時間も一緒に過ごすような内容を予定しています」とのこと。

是非、吉川さんとともに村の人の人懐っこい笑顔とゆったりとした時間、力強い暮らしぶりを感じてください。

吉川さんの活動は「旅するZoomと、これからの旅は。」で検索してください。4月に実施した様子がわかります。